

地域・産学連携プロジェクト研究
〔研究紹介〕

子育て支援アプリのデザイン開発研究

堀江 政広¹⁾, 勝村 八衣子²⁾, 田中 汐里²⁾,
三嶋 順³⁾, 中舘 崇³⁾, 鈴木 宏輔³⁾, 佐藤 俊夫³⁾

Research and development of applications for child care support

Masahiro HORIE¹⁾, Yaeko KATSUMURA²⁾, Shiori TANAKA²⁾,
Jun MISHIMA³⁾, Takashi NAKADATE³⁾, Kousuke SUZUKI³⁾, Toshio SATO³⁾

Abstract

Childcare support is an important policy. In this paper, we report development of application software for childcare support and practice of user experience for that. We will also report on the practice of childcare support.

1 はじめに

国の施策である「子ども・子育て支援新制度」を踏まえ、仙台市では子育て支援計画「仙台市すこやか子育てプラン2015」を策定している。施策の展開を図る上での課題の一つに「地域のつながりの希薄化等への対応」がある。地域のつながりの希薄化によって、子育てについて誰にも相談できず、孤立感を募らせるなどストレスを抱える親も増えている。

仙台市に居住する就学前児童の保護者約4,000人を象とした「子育てに関する相談先（仙台市子供未来局，2014）」のアンケート調査によると、相談相手として挙げられているのは、配偶者・パートナーが84.0%、祖父母等の親族が74.6%、友人や知人が59.3%と身近な相手が多い。対して、医師、保健士、看護師、栄養士などが6.2%、仙台市の子育て関連担当窓口が4.7%と、子育ての専門家に相談する人は少ない。仙台市の取り組みは施設の充実や人材の育成はしているものの、母親同士の直接的な交流の支援には至っていない。

子育てをする母親が日常の疑問を相談できるアプリ「ママリQ」は月間利用者数が400

-
- 1) 東北工業大学 ライフデザイン学部 クリエイティブデザイン学科
Department of Creative Design, Faculty of Life Design, Tohoku Institute of Technology
 - 2) 東北工業大学 ライフデザイン学部 クリエイティブデザイン学科4年生
Senior, Department of Creative Design, Faculty of Life Design, Tohoku Institute of Technology
 - 3) アンデックス株式会社 ANDEX Co., Ltd.

万人（2016年）という大きなサービスとなっている。利用者からは「普段何気なく抱いている疑問を同様の経験をしている母親たちに気軽に聞けるため、役に立っている」という声がある。

以上のことから、母親が子育てを行う上で抱く疑問や不安を、気軽に相談できる相手が身近にいることが求められていると言える。本プロジェクトでは子育てを行う母親同士の交流の支援を目的とし、アプリとそのユーザーエクスペリエンス（以下UX）のデザイン開発をする。

2 プロセス

はじめに文献および事例調査、子育て経験のある母親にインタビューを行った。そこからユーザーシナリオ法によるユーザーシナリオを作成した。このユーザーシナリオについて、子育て経験のある母親へのヒアリング調査を行った。ヒアリングから得たことから、新たにユーザーシナリオを作成し、そこからプロトタイプアプリとそのUXをデザイン開発した。そして、UXを検討するためのワークショップ（以下WS）を計2回実施した。

2.1 ユーザーシナリオ

子育て経験のある母親へのヒアリングでは、母親が安心して子育てを行うために必要なこととして、「同年代の子を持つ母親との交流を持つこと」、「地域特有の情報を得ること」、「母親の抱える悩みについて、お互いに共感を得られること」、の3点が得られた。そこで、子供の月齢・年齢が近い母親同士が集うイベントを主体としたユーザーシナリオを作成した。ペルソナは、子供の月齢・年齢が近い、育児休暇中の母親とした。

- (1) 子育て支援施設で、ママを対象とした交流イベントのチラシをAママが手にする。
- (2) イベントに参加したAママが、他ママとグループ活動をする。
- (3) イベントを通じてママ同士が交流をする。
- (4) イベントの結果を子育て支援アプリのコンテンツとする。
- (5) アプリは一般に公開される。

このシナリオのUXを検討するために、WS1を実施した。

2.2 ワークショップ1

「子供を連れてきた母親が、スマートフォンを使用して屋外で情報の記録を行うことができるか」を検討するためのWS1を、2016年8月29日にエル・ソーラ仙台の託児室で行った。対象は1歳未満の子供を連れてきた母親である。母親はどのような情報を収集したいかテーマを考え、記録を行う場所を決定した。このWSのテーマは、母親の希望により、「子育てに関するチラシ等が置かれている場所」とし、アンパンマンミュージアム内にある「仙台市子育て応援情報ステーション」を訪問した。母親はコミュニケーションアプリ「LINE」を使い、施設の「位置情報」、「名称」、「説明」、「写真」を記録した。しかしながら、「LINE」は「説明」の文章を作成するには適していないことが明らかになった。そこで、記録のために特化したツールが必要となった。

2.3 ワークショップ2

WS1で得られたことから、情報を記録するための専用フォームを制作した。このフォー

ムを利用したWS 2を、2017年3月12日にエル・パーク仙台の「子供の部屋」で行った。対象は1歳の子供を連れてきた母親である。テーマはWS 1と同じ「子育てに関するチラシ等が置かれている場所」とし、「サポセン（仙台市市民活動サポートセンター）」を訪問した。母親は専用フォームを使用し、情報を記録・投稿した。「写真」については、メールで送信した。専用フォームを使用することにより、「場所の説明」をスムーズに・記録・投稿できた。この情報をコンテンツとするプロトタイプアプリのデザイン開発と、イベントのUXデザインを行った。

3 子育て支援アプリのサービス

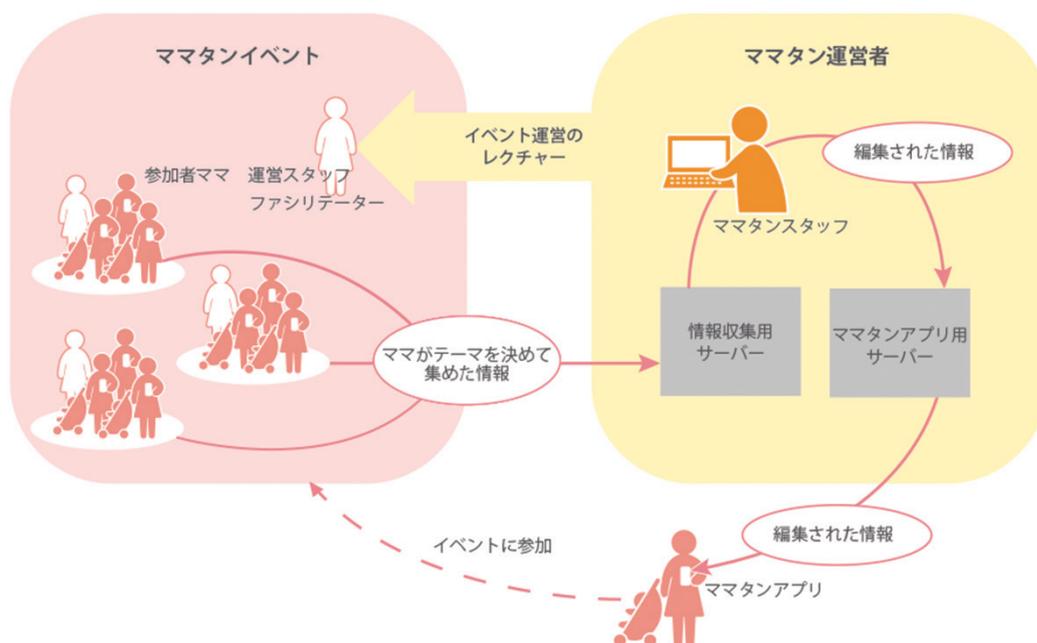


図1 子育て支援アプリのモデル図

子育て支援アプリのサービスを、「ママタン」と呼ぶ。「ママタン」は母親たちの交流イベント「ママタンイベント」と、子育て支援アプリの「ママタンアプリ」の2つから成る(図1)。

3.1 ママタンアプリ (プロトタイプ)

「ママタンアプリ」のトップ画面には、仙台市の子育て支援施設「のびすく（全4箇所）」がある(図2左)。選択した「のびすく」を中心とした地図が表示される(図2中)。地図上にはイベントで情報収集を行った場所にピンがあり、選択すると施設の詳細が表示される(図2右)。施設の詳細では、施設の基本情報、写真、母親からのコメントを見ることができる。

「ママタンイベント」で集めた情報をママタンスタッフが編集し、アプリのコンテンツとする。施設の写真は、施設の外観、入り口、情報が置かれている場所等、複数を掲載す

る。「情報分類」は、施設に関する情報を探すときの手がかりとなる。「ママからのコメント」は、施設の特徴を母親の視点で紹介する。ママタンレポートや振り返りの内容を踏まえ、情報収集をした際に母親が感じたことをまとめる。施設の基本情報は、「ママタン」のスタッフが調査および各施設へ確認して掲載する。

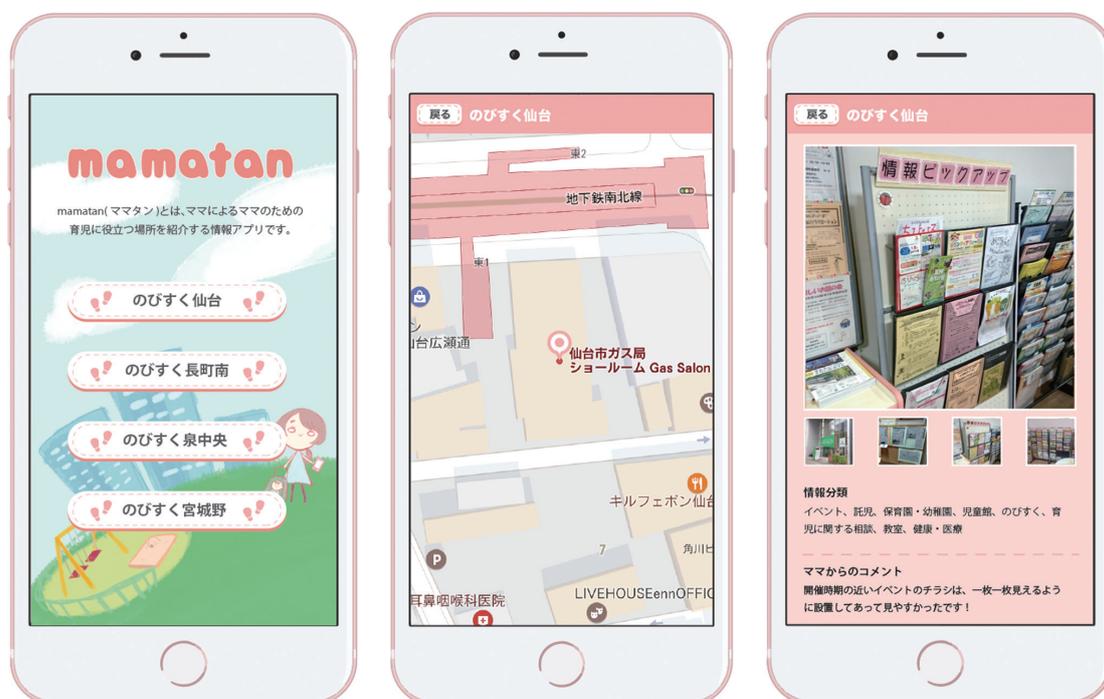


図2 ママタンアプリのトップ画面（左）、地図画面（中）、詳細画面（右）

4 子育て支援イベント

本プロジェクトにおいて、「ママタンイベント」の実践が重要である。そこで、子育て支援イベントを実施した。

4.1 イベントの概要

イベントのタイトル・テーマは「ママのマッピングパーティー – インスタ映えするスポットを探そう！」である。「インスタ映え」とは、SNSの「Instagram」と「写真映え」を組み合わせた造語で、投稿した写真の見映えが良いことを言う。実施日時は2017年11月24日（金）の11時から15時の4時間である。参加者は子育て中の母親3名で、それぞれ1～2人の子供（乳幼児）を連れて参加した。タイムスケジュールは次の通りである（図3）。

- (1) 宮城県美術館に集合してイベントの説明（20分間）。
- (2) 宮城県美術館の敷地内で各自の携帯電話で写真撮影（30分間）。
- (3) 交流のためにカフェでランチ（70分間）。
- (4) 徒歩で地下鉄東西線の国際センター駅に移動し、各自の携帯電話で写真撮影（50分間）。
- (5) 国際センターの会議室に移動し、写真の発表会（30分間）。



図3 参加者が投稿した写真（左）、イベントの様子（右）

4.2 イベントの結果

3名の母親は、すでに友人関係にある2名の1組と、唯一ベビーカーで参加した1名とに分かれて、撮影を行うこととなった。これは、当日の午前中に降雨・降雪があり、ベビーカーによる坂路の移動が危険なことから、スロープやエレベーターの利用のために離れてしまうためであった。しかしながら、ランチでは子育てに関する会話が活発に行われていた。これは共通の体験を子供と一緒にしたこと、共有した話題から、会話のきっかけができたと考える。写真の発表会では、他者の撮影した写真について、感心したり質問したりと会話が弾んでいた。加えて、発表会後のヒアリングでは、「同様のイベントがあれば参加したい」というイベントについて好意的なコメントと、子育て支援アプリのコンテンツ作り（母親視点での施設レビュー等）について協力するとのコメントがあった。

5 まとめ

調査とWSから、子育て支援アプリのプロトタイプデザイン開発と、母親たちの交流イベントのUXデザインを行った。この子育て支援アプリに企業広告を掲載するアイデアを加えたビジネスモデルを、「2016 ビジネスモデル発見&発表会東北大会」のキャンパス部門に応募した。書類審査とプレゼン審査（2016年12月12日）により、スポンサー賞・IOデータ賞を受賞した。このことから、ビジネスモデルとして展開する可能性が期待できる。子育て支援イベントの実践では、子育て支援アプリのサービスについての理解を得られた。今後はコンテンツに特化したアプリのデザイン開発と、子育て支援施設等との協同によるイベントの開催を実施したい。さらに、対象ユーザーを父親や妊娠中の女性に拡大したデザイン開発も視野に入れたい。

謝辞

WSとイベントに参加して頂いた皆様と、イベントに協力して頂いたカヨウカフェに感謝致します。そして、イベントの運営に携わったアンデックス株式会社の社員の皆様と、堀江研究室の学生に感謝致します。

参考文献

1. 厚生労働省, 「人口減少社会に関する意識調査」, 2015
2. 仙台市「仙台市すこやか子育てプラン2015」, 2015
3. 仙台市子供未来局, 「子ども・子育てに関するアンケート調査 調査結果報告書」, 2014